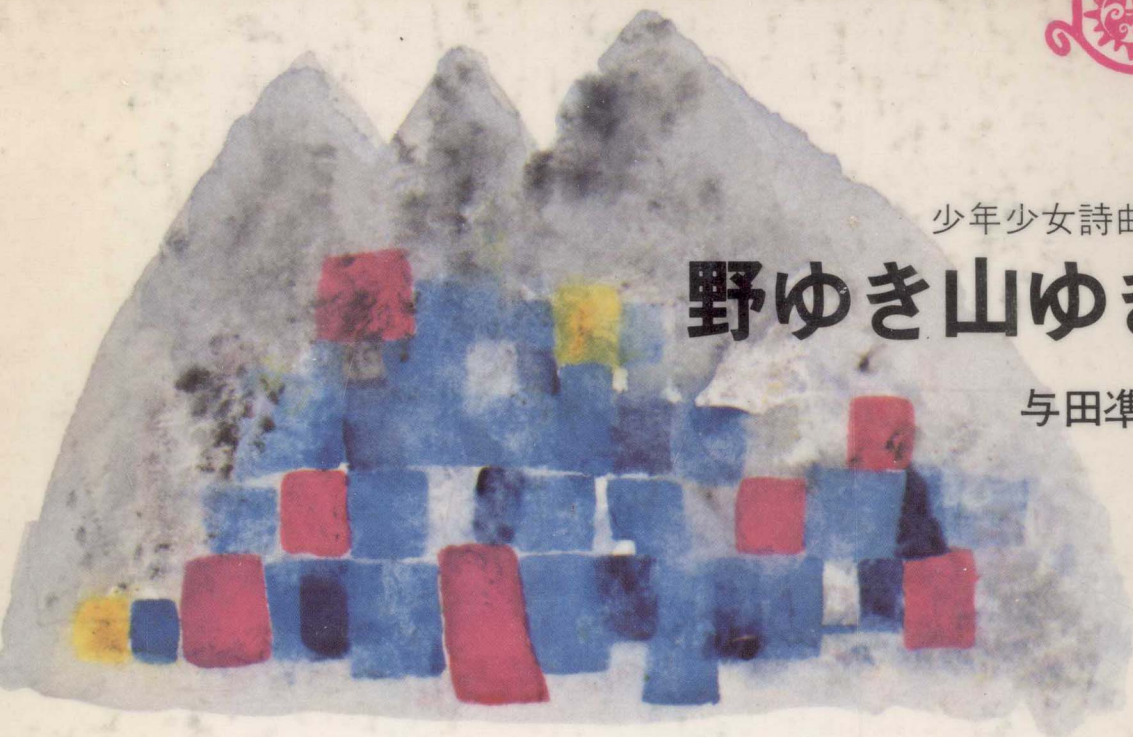




少年少女詩曲集

野ゆき山ゆき

与田準一



《著者紹介》

よ だ じゅんいち
与田 準一

1905～

福岡県生まれ。郷里柳川で小学校教師として勤めるかたわら、雑誌「赤い鳥」「童話」に童謡、童話を投稿、北原白秋に認められる。1928年上京、「赤い鳥」の編集にたずさわる。のちに聖聖歌と同人誌「チチノキ」を発行、さかんな創作活動を行なう。1933年処女童謡集「旗・蜂・雲」を出版。1940年「山羊とお皿」その他で、第1回児童文化賞を受賞。著書に、童話集「小さな町の六」「父の手紙」長編「五十一番めのザボン」「与田準一全集」(大日本図書刊 サンケイ児童出版文化賞大賞)など多数。日本児童文学者協会名誉会員。

《画家紹介》

おおくに あき お
大 国 章 夫

1923～

満洲生まれ。中央大学法学部卒業。猪熊弦一郎氏に師事。1949年以来、新制作展、安井賞展などに出品。新作家賞、アジア青年美術家展佳作賞などを受賞。1965、69年渡欧、フランス、スペインに滞在、制作活動を行なう。「青い髭」(白井書房)「新しい造形と美術」(学習研究社)などの著書がある。新制作協会会員。

NDC 911

野 ゆ き 山 ゆ き

与田準一

大日本図書 1973

118p. 22cm

小学校中・高学年向

1973年 3月31日 第1刷発行

著者 与田準一／発行者 佐久間裕三／発行
所 大日本図書 東京都中央区銀座1—9
—10〈〒〉104 東京 (03) 561—8671～9
振替 東京 219 番／印刷 東洋印刷／製
本 岸田製本

野ゆき山ゆき

© JUNICHI YODA 1973

8392-217369-4398

日本音楽著作権協会承認第475866号

少年少女詩曲集

野ゆき山ゆき

与田準一



子ども図書館——大日本図書

白い少年

白い少年・6

コウホネの花・7

目ざめ・8

野ゆき山ゆき・10

風船歌・12

となりの国・14

ケンチとノンノといぬ・16

下と上との会話・17

あの山この山・18 伊藤翁介曲・(1)

夜と太陽・20

琉球の星・21

沖永良部ムンガタイ・22

オウギシとオウケンシ

オウケンシ・26

筆づかい・29

片かた袖そで・31

オウギシ・34

伝でん説せつ・37

入じゆ木ぼく道どう・41

ミルク・ウエー

ミルク・ウエー・46

キリストのヨルカに召めされた子ども・48

白鳥の国・52

やまとよぶ・61

洞どう爺や湖こ畔はんの熊くま・64

さかなな季節きせつのなかで・68

わかいおじさん

新しい日のことば・72

すばらしい人間世界・74

わかいおじさん・78 牧野統 旋律 小林福子 補修編曲・(4)

ぼくらのもの・80 長谷川良夫 曲・(6)

いずみの声・82 平井康三郎 曲・(11)

世界の希望・84 佐野量祥 旋律 斎藤高順 補修編曲・(13)

波・86 川口晃 曲・(16)

わたしは見た・88

曲 譜

詩心の遍歴Ⅱ 神宮輝夫・89

装幀・画 大国章夫

白い少年



白 い 少 年

夜明けの

一番列車れっしゃが着いた。

白い少年が

ひとりおりてきた。

花巻はなまきから来たのだという。

「兄にいさんの

結婚けっこん祝いわいに持ってきた。」

朝日のさす広場でそういつて、

手にした剝製はくせいのキジを

かかげてみせた。

コウホネの花

コウホネの花は
城のおほりにさく花。

コウホネの花は
水に黄色く浮く花。

コウホネの花は
むかしの紋どころの花。

コウホネの花に
白い夏の雨がけふる。



目ざめ

ひとつの台うてなに

ひとつずつ

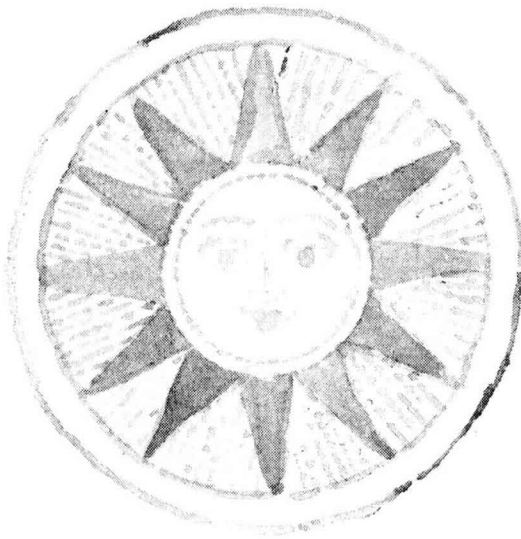
花すきとおる

露つゆの玉。

緑みどりの野原が

市場いちばをひろげた、

くるめいて



太陽は七色に。

たまゆら

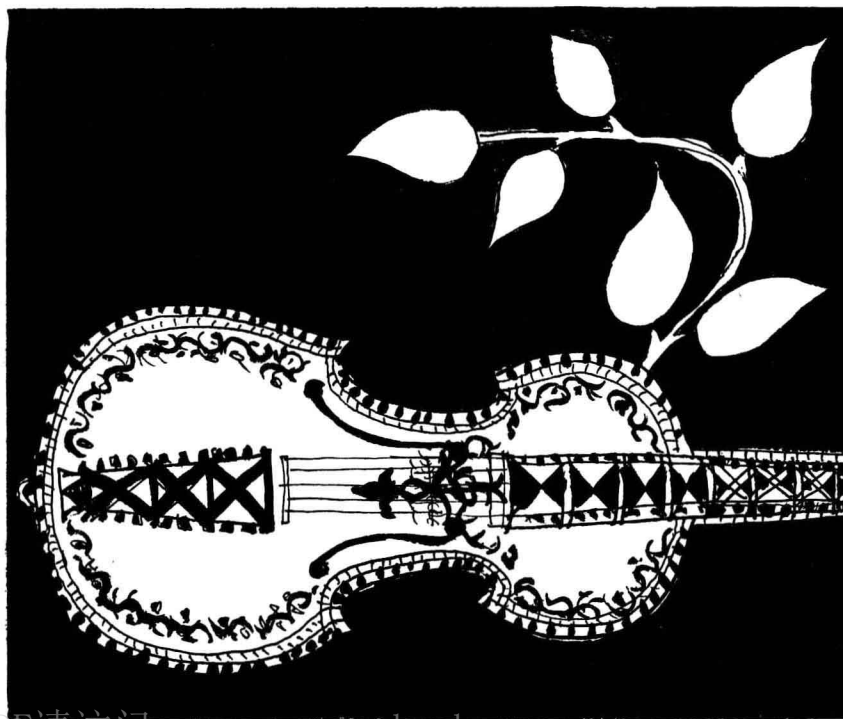
たまゆら

狭霧のベール

ぬぎすてて、

目ざめの花が

呼吸づいた。



野ゆき山ゆき

少年たち

少女たちが、

野ゆき山ゆき

手をふりあって

うたって

ゆく。

風の子たちが、ほうら、

春のことばを

高い木のこずえの花にしたり、

ホオジロの声にしたりして、

いろんないたずら遊び

しているよ。

雲の少年たち

少女たちは、

じんぞうこ
人造湖のほとりをはなれて

かげろうの空へ

とんでゆく。



風船歌

フランスの赤いひとつの風船が
日本のスクリーンを
とんでいたころだった。

北京の広場で
やっぱりゴムの風船が、それは
無数にとんだんだ。

赤くゆらめくひとつの風船は、ひとりの
子どものあとを追う。また先をゆく。
ろじからろじへ、パリのゆめ、
くたびれて着く原っぱに

ひとつのガスをはく。

黄や水いろや紅壁こうへきのいろ、とりどりに、
無数の風船ふうせんは

子どもたちの手から

中国ちゅうごくの空の藍あいにとびこみ、

ひとびとの眉まゆをひきあげる。

フランスの赤いひとつの風船ふうせんが

日本のスクリーンを

とんだころ、

北京ペキンの広場では色とりどりの
無数の風船ふうせんが、

ひろがる空を呼よんだんだ。

となりの国

となりの国を歩いたら、

ラバ⁽¹⁾

雲

エンジ^{ユ、(2)}

朝の荷ぐるま、

さえずりに似^にて

きゆる

ころ

ころ。

ライラック⁽³⁾の村たずねたら、

塔^{とう}

風

水車^{すいしゃ}、

ライチ⁽⁴⁾の実、

三時に出た茶に

きゆる

ころ

ころ。

〔注〕

(1) ラバ||おすロバとめす馬のあいのこと。からだは馬より小さいが、じょうぶでよくしんぼうして働く。

(2) エンジュ||中国原産の落葉きょう木。ベキンの街路樹に使われているのを見た。

(3) ライラック||リラ。花のかおりがよい。

(4) ライチ||レイシ。中国原産の常緑小きょう木。実は食べられる。